

ジャーナリズムの現場から

大鹿靖明＝編著



講談社現代新書

2276

ジャーナリズムの現場から

大鹿靖明＝編著

講談社現代新書

2276

講談社現代新書 2276

ジャーナリズムの現場げんばから

二〇一四年八月二〇日第一刷発行

編著者

大鹿靖明 おおしかやすあき

発行者

鈴木哲

発行所

株式会社講談社

電話

東京都文京区音羽二丁目二二二 郵便番号 一〇二一八〇〇一

出版部 〇三―五三九五―三五二一

販売部 〇三―五三九五―五八一七

業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者

中島英樹

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。〔R〕〈日本複製権センター委託出版物〉

複写を希望される場合は、日本複製権センター（電話〇三―三四〇一―二三八二）にご連絡ください。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

はじめに——本書に至る経緯

3

第1章 命がけの探検取材から見えてくる「真実」

11

角幡唯介（ノンフィクション作家／探検家）

第2章 経済ジャーナリストとしての矜持

47

高橋篤史（ジャーナリスト）

第3章 現実主義に立って、論を説く

81

長谷川幸洋（東京新聞論説副主幹）

第4章 タブーに果敢に挑んでこそその週刊誌ジャーナリズム

115

安田浩一（ジャーナリスト）

第5章 取材相手に無理強いしない「一緒に考える」という立ち位置

145

大治朋子（毎日新聞エルサレム支局長）

第6章 腕利き社会部記者の「美学」とセカンドライフ ————— 169

坂上遼〈小俣一平〉（探訪記者）

第7章 生活と作品が連動、子育てと家族の問題を追いかける ————— 209

杉山 春（ルポライター）

第8章 あえて歴史にこだわる理由を話そう ————— 243

栗原俊雄（毎日新聞学芸部記者）

第9章 日経新聞社長と刺し違えたスクープ記者の「挽歌」 ————— 271

大塚将司（元日本経済新聞記者）

第10章 文字と放送——二つの世界に生きる 強い使命感が支える驚異の取材力 ————— 301

堀川恵子（ジャーナリスト）

あとがきにかえて——ヤング・パーソンズ・ガイド ————— 334

参考・参照文献 ————— 349

ジャーナリズムの現場から

大鹿靖明＝編著

講談社現代新書

2276

さくらんぼのふりかけ

大塚 隆夫

食糧問題研究会

写真撮影：岡田康且（大治朋子氏は編著者撮影）

はじめに——本書に至る経緯

本書の編著を思い立った直接のきっかけは、2011年3月11日の東日本大震災とそれに続く東京電力の福島第一原発爆発事故の取材を通じて感じた今の報道のありようだった。

あるとき記者会見場は、まるでソロバン教室のようだった。つめかけた記者たちは一斉に手持ちのパソコン画面に目を落とし、猛スピードでキーボードをたたいていく。未曾有の大地震が起き、原発が相次いで爆発したというのに、レクチャー担当者のほうに目をむけたがらない。バチバチバチバチ。会見場は一斉にキーをたたく音が反響する。

戦後最悪の災害と人類史上に残る惨事がひき起こされたというのに、記者会見ではこんな光景が日常的に繰り広げられた。東電本店で、原子力安全・保安院で、経済産業省で、そして官邸で。そのあまりに異様な光景に驚いた。メモ打ちのためのキーボードに神経を集中すれば、肝心の質問がおろそかになるのではないか、と思ったからだった。

みなICレコーダーを机の上におき一部始終を録音していた。ならば何もタイピスト

の真似事なぞ、する必要はないはずだった。どの新聞社も放送局も一社あたり数人の記者が出席しているので、なおのこと、そろいもそろってパソコン打ちをする必要はない。

こんなことは2011年以前には、あまり見られない光景だった。少なくとも自分が取材にかかわった大きなニュース——05年のライブドアのニッポン放送株取得、06年のライブドア・村上ファンド事件、そして10年の日本航空の倒産——で、記者たちが一斉にパソコン打ちに注力する姿を目にした記憶はない。いたとしても、速報性が問われる金融経済通信社のブルームバーグやロイターの記者ぐらいだったろう。

あれだけの事故が起きたというのに、記者会見に登壇する東電や保安院の担当者はまるで「他人事」のように事態を客体視して伝える。それに挑むべき記者たちは妙に行儀がいい。問いただすというよりもむしろお尋ねする、教えてもらおうといった塩梅である。記者たちの姿勢は、隠された真相を暴くという挑戦的なものだったとは言い難かった。「きょうの原発の様子」を教えてもらい、それで定型の記事に仕立ててゆく。

ある日のこと、民放の記者が「俺たちは表にいる連中とは違うんだからさ」と言っ
て、東電の広報担当者に擦り寄るのを目にしたことがある。「表にいる連中」とは、東電本店前で抗議行動をする反原発派の活動家を指すと思われた。「連中」とは違って、

俺たち、ものわかりのいい報道機関なんだから、そんなに杓子定規な対応ではなく、少しはサービスしてくれよ——。そう言っているように聞こえた。

やがて東電の首脳の自宅前で印象的な光景に遭遇した。経営責任があり、事故収束の責任者でもある首脳に対して、記者たちはおもねり、おもんばかり。ある晩の最初の質問は「お身体は大丈夫ですか」だった。そんな低姿勢だから向こうはつけあがる。あれだけの惨事を招いたというのに、カエルの顔にションベン、他人事である。ノブレス・オブリージュのかけらもない東電エリートの首脳。それに対して御機嫌を伺うといった調子の記者たち。かくして報道機関は大本営発表を垂れ流し、マスコミ不信は増幅されてゆく。

記者たちがやたらパソコンバチバチをやりたがるのは、報道機関の内部でメモを回す文化がすっかり定着してしまったからだった。大きな事件や事故では、政治部、経済部、社会部、科学部など複数の部署がかかわり、情報源も政治家、官僚、民間企業など多岐にわたる。だから自分の持ち場の記者会見や取材成果をメモにして仲間内の回覧に供する。

ときとして、こうして集められたメモをもとに記事がつけられてゆく。大した中身でもないのにやたら執筆者の署名の数が多い記事は、たいていこの種のものである。つま

り記者たちは「パーツ屋」だった。

素材集めから最終形に仕立てるまでを一貫して請け負う「垂直統合」モデルではなく、メモやパーツ原稿をもとにアンカー役が最終形に組み立てる「水平分業」モデルが広がっている。まるで中国製の安価な家電製品や情報機器のように、没個性で「安さ」以外に魅力のない商品ができあがる。水平分業体制のパーツ屋では、ろくな記者が育たないと思う。パソコンをバチバチ打ち、メモを回しているだけでは、「この問題をやり抜くぞ」という執念や責任感、情熱が生まれにくい。そもそも取材範囲が狭くなるうえ、長い原稿を書く力が身につかない。

定型のチープな記事がインターネットやスマートフォンを通じて瞬時に消費されてゆく。まるでニュースのコモディティ。多くのメディア企業でいま進んでいるのは、そうした事態である。

「いやあ、せっかく社長の記者会見を開いても、みなさん一齐にパソコンをバチバチ打ち出し、あまり質問しないんですよ」。全日本空輸の広報担当者はそう言って嘆いた。ソフトバンクの広報担当者は「記者会見をネット上で中継しているせいか、各社さん、質問したがないんです。うっかりつまらない質問をしてネット上でからかわれるのを

恐れているんじゃないですか」と言った。

この数年間、残念ながら現場の劣化は激しい。

はじめに全国紙や放送局の首脳や経営幹部の間で、専制政治、官僚主義、不正行為が広がっていった。経営陣の目を覆わんばかりの劣化や墮落は、やがて組織を汚染し、中間層に伝染し、ついには現場をむしばみつつある。

あれだけ官僚の天下りや政治家の世襲を紙面で批判しておきながら、経営幹部は平気でキー局や仙台あたりの地方局に天下り、自身の子女を勤め先やそのグループ会社に就職させてしまう。しかも、それを恬として恥じない。まるで労働貴族ならぬ「報道貴族」である。こんな上層部の倫理観や使命感の欠落が、組織を汚すのだ。

本書の執筆の動機には以上のようなことがある。悪弊が身についていない若きジャーナリストたちにむけて、腐敗墮落幹部や社内官僚と堕した組織ジャーナリストたちのアンチテーゼとなるような、何か一定の見本を示したほうがいいのではないかと思えたのである。

組織内に指標となる存在がいなくても、自身の属する組織を離れて目を広く業界内に

向ければ、「これは」と思えるジャーナリスト（ノンフィクション作家、ルポライター）は点在于ている。

毎日新聞の大治朋子氏やジャーナリストの堀川恵子氏のように、常に新しいテーマに挑み、優れたレポートを発表する人の方法論は、後進の記者の目標になるだろう。坂上遼（小俣一平）氏のようにNHKを退職後に原点に忠実に創作活動に邁進するのは、中高年社員にとって天下り以外の選択肢を考える良い材料となるはずだ。勤務先を辞めてフリーになろうと思うのなら角幡唯介氏や高橋篤史氏の章をまずは読んでほしい。いったん踏みとどまって長谷川幸洋氏が助言する組織の徹底利用を考えるのもひとつの方策である。

この仕事には意義があり、やりがいがある。先行事例を通じて、そのための基本的な姿勢や方法論を示してみる。いま現役で働く中堅・若手にはいくばくかの「参考書」になるはずだ。そして、この世界に興味をもっている人たちには、新世代の書き手やノンフィクション作品の「入門書」にもなるだろう。

2014年8月

編著者

目次

はじめに——本書に至る経緯

3

第1章 命がけの探検取材から見えてくる「真実」

11

角幡唯介（ノンフィクション作家／探検家）

第2章 経済ジャーナリストとしての矜持

47

高橋篤史（ジャーナリスト）

第3章 現実主義に立って、論を説く

81

長谷川幸洋（東京新聞論説副主幹）

第4章 タブーに果敢に挑んでこそ週刊誌ジャーナリズム

115

安田浩一（ジャーナリスト）

第5章 取材相手に無理強いしない「一緒に考える」という立ち位置

145

大治朋子（毎日新聞エルサレム支局長）

第6章 腕利き社会部記者の「美学」とセカンドライフ ————— 169

坂上遼〈小俣一平〉(探訪記者)

第7章 生活と作品が連動、子育てと家族の問題を追いかける ————— 209

杉山 春(ルポライター)

第8章 あえて歴史にこだわる理由を話そう ————— 243

栗原俊雄(毎日新聞学芸部記者)

第9章 日経新聞社長と刺し違えたスクープ記者の「挽歌」 ————— 271

大塚将司(元日本経済新聞記者)

第10章 文字と放送 二つの世界に生きる 強い使命感が支える驚異の取材力 ————— 301

堀川恵子(ジャーナリスト)

あとがきにかえて——ヤング・パーソンズ・ガイド ————— 334

参考・参照文献 ————— 349

第1章

命がけの探検取材から見える「真実」

角幡唯介（ノンフィクション作家／探検家）

角幡唯介

(かくはた・ゆうすけ)

ノンフィクション作家・探検家。1976年北海道芦別市生まれ。函館ラ・サール高卒、早稲田大政治経済学部経済学科卒。同大探検部OB。2003年に朝日新聞社に入社し、08年に退社。『空白の五マイル』で大宅壮一ノンフィクション賞、開高健ノンフィクション賞、梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞、次作『雪男は向こうからやって来た』で新田次郎文学賞受賞、『アグルーカの行方』で講談社ノンフィクション賞を受賞。

